

## 助成年度：平成4年度

[所属] 東京国立文化財研究所 芸能部  
[役職] 調査員  
[氏名] 代表者 山本 宏子 (他計3名)

[課題]

### 民俗芸能にみる水管理・環境保全とメンタリティーの関係の変容に関する研究

[内容]

神戸市北区山田町で明治・大正生まれの男女数人に干ばつの経験についてインタビューをおこなった。水の不足はかなり恒常的だったらしく、農家がそれぞれ「小池がかり」という溜池を持っていた。また、水田(みずた)という水を抜かない田も作っていた。さらに、水車で用水を田の上まで送っていたところもある。こういった状況のなか、大正・昭和の初期までの日照りの年に、農民達が自主的に「雨ごい」をおこなっていたことが確認できた。昭和12年か13年の夏、山頂で干把焚をしながら鉦で囃し、皆で歌ったという。このときは下山途中で「少しだが雨が降った」という。そのころ小学生だった農家の子供達は先生の引率で「雨ごい」に参加している。その印象は強烈だったらしく、今でも当日の様子をはっきり記憶していた。このときの経験から「雨ごい」をすると雨が降ると信じている人が多い。北区山田町と隣接する西区神出町でも、「雨ごい」が行われていた。しかし、神出では「雨ごい」は干上がった田圃で、藁を炊いておこなわれるなど、その形態に差がある。また「雨ごい」の後「少ししか降らなかった」と古老達はいふ。この言い回しには、山田での「少しだが降った」というとらえ方と差が見られる。このようなメンタリティーの違いが生まれたのには次のような理由が考えられる。神戸市山田町(北区)と神出町(西区)はともに水田農村である。が、開発時期は大きく異なり、山田町のそれは中世以前であるのに対し、神出町の開発は近世中期以降で、この差異をうみだした最大の理由は、地形の制約のために水利開発の歴史が大きく異なっていることにある。山田町は加古川の支流山田川の上流域に位置する山間の農村で、もともと水利の便には相対的には恵まれたところで、かなり早い時期から水田社会の形成がみられた。一方、周囲を30~60mの急崖に囲まれた加古川左岸台地(加古台地)の北東部に位置する神出町は、水系的には山田町とは全く異なっており、近世中期以降の綿花商品生産の発達に伴って、ようやく局地的な湧水を利用した畑の開発が進むようになったところで、1891年に開通する淡河疎水によって一挙に開田化した農村である。このような事情による水田社会形成史の差異は、伝統的な民俗芸能の発生と今日的な存在形態に大きな影響を与えている。

このような水田社会形成史の差異は、「河童」の芸能にも現れている。筑後川流域に伝わる、いわゆる「河童楽」と呼ばれる芸能は、民俗芸能の芸態分類上、「楽躍り」あるいは「楽打ち」「楽」と呼ばれる太鼓躍りに属する。この「楽躍り」は大分県・福岡県・山口県に分布しているが、「河童」と結びついているのは、筑後川およびその支流と山国川に限られている。しかも、久留米市を境とした上中流域に分布が限られている。また、これらの「河童楽」の巻物に書かれた由来には、1 平屋の怨霊説、2 加藤清正の河童退治説、3 菅原道真説などがあり、それぞれの伝承地で異なる。さらに、何のためにこの芸能を演じたかという目的も、1 雨ごい、2 牛馬を守る、3 五穀豊饒などが上げられている。しかも、同じ「河童楽」でも時代が下るにつれて、目的が変化する。このような差異や変化は、筑後川の水利施設の建設と関わりがあるものと考えられる。